

<後期オリエンテーション>

A. テーマ：宗教と科学の関係論構築に向けて——パネンベルク（1）——

B. 後期の予定

Wolfhart Pannenberg, *Wissenschaftstheorie und Theologie*, Shurkamp, 1977.

Einleitung: Wissenschaftstheorie und Theologie (S.7-30)

10/7, 14, 21, 28, 11/4, 11, 18, 25, 12/2, 16, 1/8

C. 前期授業のまとめ

"Humanbiologie --- Religion --- Theologie.

Ontologische und wissenschaftstheologische Prämissen ihrer Verknüpfung (1988)"

S.99-111

[99/1-100/1]

シェーラーの「三つの理念圏」「思考圏」

ユダヤ・キリスト教的伝統：神との関係における人間

ギリシャ・古代的伝統：理性的存在としての人間

現代科学：生命の進化の産物としての人間

三つの思考圏における統一の欠如（人間像の分裂）への批判から、人間を世界開放的存在として記述する人間学の企投

ゲーレン以降の展開とシェーラーで重視された精神形而上学や宗教的テーマとの関連は次第に縮小される。シェーラーの精神概念は引き継がれていない。

シェーラー：人間の世界開放性は精神によって構成される。精神は生命と対立的な原理であり、その中心は最高の存在根拠に置かれる。

人間学の思考圏の統合への努力は失われた。

[100/2]

ユダヤ・キリスト教的伝統

神との関係性における人間の固有性

神の似像性と他の被造物との差異、神の支配の委任としての他の被造物への支配
恣意的な支配ではなく

[100/3]

聖書では、人間の創造は動物世界によって媒介されていない。ここに進化論との相違がある。

しかし、進化論は聖書的創造論と一致しないと無条件的に言うことはできない。それは進化論をいかに理解するかに依存する。

進化論が人間を機械論的世界像（18世紀から19世紀にかけて自然因果性の機械論的理

解に連関した) から解放したと考える神学者がいた。

進化を導出できない新しさの成立過程 (新しさの源泉) と解するならば、進化論を人間に先行する生命に対する人間の平準化と見なす必要はない。救済史の神学と結びつけうる。創発的進化。

[100/4-101-102/1]

神学の人間科学、とくに人間生物学に対する関係へと議論を一般化すること。

世界や人間といった対象領域に取り組み諸科学を考慮することなしに、神学は世界を創造として、また人間を神の被造物としてあえて主張することはできない (諸科学を無視できるのは、それらが真理に基づかない場合だけ)。 逆に、同様のことは、神学に対する物理学や人間科学についても妥当する。

↓

諸学問のなす主張の合致という問い

しかし、まさに世俗文化の地盤において、諸科学は神学や宗教を無視することができる。

↓

キリスト教的言明の真理主張が保持され明示されるのは、諸科学との関係がテーマ化される時のみ。

人間が本性的に神との交わりへと規定されているのだとするならば、人間についての人間科学的研究は神へと向けられているという事態に突き当たるにちがいない。この事態は人間科学においては神学におけるのとは別の観点と言語によって捉えられる。

人間生物学においても、同様の議論が成りたつ。

動物世界との関係に絞って人間の固有性を規定しようとする人間生物学も何らかの仕方人間神への関わり気づかざる得ない。このような仕方明確にテーマ化するのではないとしても。

↓

しかし、神との関係が人間の間人性を構成するという前提は、自明ではない。

徹底的な宗教批判の基本的立場：神関係は本性的に人間存在に属しているのはなく、人間本性にとっては偶然的なものである。この立場に立つならば、人類史に広がる宗教的態度に対して、宗教的表象や宗教的態度が非宗教的根から成立することを説明しなければならない。

世俗的な諸科学は、こうした問いを未解決のままにし、科学的探究においては、それを次第に縮小させることができる。宗教的伝承の真理主張に対する方法論的な中立性。

しかし、宗教の真理主張に対するこのいわゆる中立性は、この真理主張はもはや真剣に受け取る必要がないことを意味する。 cf. 無神論

[102/2]

以上の世俗文化の状況下で、なおもキリスト教的伝統の真理主張を真剣に受け取ろうとするのならば、神学は、方法的には、次の推測によって方向付けられねばならない。

世俗的な人間科学において、構成的な神関係は縮小されつつあるにもかかわらず、諸科学によって記述される事態の中で生きて存続しており、人間的實在の全現象に対して

構成的である。

人間科学において無視されつつある関連づけを人間科学によって記述される現状の中において際立たせ、人間の固有性によって中心的意義を有するものとして強調するという神学的な試み

[102/3-103/1]

神学と人間科学との関係は相互批判的な関係である。

論争的關係ではないが、差異を持ちつつも事柄に対する共通のテーマ設定を有しているという意識によって規定された関係

経験的な調査結果に矛盾する神学的な理解を批判するのは正当である。

進化論と対立する

進化の過程を経ない神による直接的な創造という神学理解、
種の普遍性のドグマ

しかし、神学は人間科学の結果を単に受け容れ、それに神学的主張を合わせるということが期待されるべきではない。科学的所見は、批判的解釈を介してのみ、受け容れられる。

人間科学の側に人間の固有性の探究に対する宗教的テーマ設定の価値を認める用意がある場合には、神学と人間科学のより緊密な関係は可能になる。使用する言語の相違はあるが、人間科学に対して、宗教的態度の対象をより厳密に確認し、宗教的表象の真偽についての決定に当たることを要求することはできないだろう。

キリスト教神学は人間科学に対して様々な宗教的真理主張の対立における中立性を認めねばならない。しかし、それは人間の実在性にとって宗教的テーマ設定一般の価値を無視するような中立性を正当化することではない。

[103/2-104/1]

以上の一般的な考察から、人間科学、とりわけ人間生物学の現状において、神学の側から解明を必要とするテーマが明らかになる。

1. 動物世界、とくに人間にもっとも近い種との関係で、人間を区別するものは何か。

2. 進化と文化史とのいかに関係するか。

人類史が進化の単なる継続ではないとすれば、それは、人間に先行する生命形態や人間においてなおも妥当する生物発生の規則とは区別された人間の固有性の表現として、人類史は解釈されねばならないであろう。

3. 神の実在に対する宗教的関わりの人間学的相反性に注目すること。

神との交わりの欲求と神からの自立・離反の欲求（罪）

この相反性は文化形成水準ではじめて生じたのか、あるいは人間生物学的に記述される固有性においてその前提が見いだされるのか

4. 人間はその差別的な人間性（宗教的な生命の設定）によってのみ神と関係するのか、

人間と人間に先行する生物との関係は神学的解釈の対象となるのか。

神学的解釈の対象とすることに対する経験的出発点は、生命諸現象の生物学

的記述の中に存在するのか

人間固有の宗教的な生命のテーマ設定は人間に先行する生命の基礎にある事
態の人間特有の変異なのか

1.

[104/2-105/1]

人間固有性への関心

有機的生命世界における人間の特殊な地位（シェーラー）

シェーラーの理解する「精神」は進化によっては媒介されない。これは神学的人間学（靈魂の起源、神から個人へ直接付与される）の伝統と対応する。

聖書において、靈は人間の魂の構成的部分ではない

[105/2]

伝統的な神学的人間学を考慮するとき、精神的存在としての人間理解は進化論と対立を引き起こす。伝統的な理解を聖書に照らして修正できれば、対立は解消する。

[105/3]

人間の精神性とは世界開放性と置き換え可能であり、本能的振る舞いに見られる環境拘束性から区別される。人間の態度の特殊性についての要約的な名称として使用可能。

[105/4-106/1]

神学的に興味深いのは、開放性が伝統や文化形成への指示と関連しているだけでなく、人間とは宗教を有する存在であるという事実に結びついていることである。経験対象への開放性は、個々の対象を超えた、そしてその有限性を超えた開放性を含意する。世界開放性の意味は最終的には、世界を超えて神的なものへと開かれていることの内にある。

[106/2-107/1]

動物と人間との差異を神や神々についての知に認める見解は古代（キケロ）にすでに見られるが、おどろくことに、近代諸科学では、宗教は人間の特殊性としたほとんど役割を果たしていない。宗教が人間本性との関連で副次的であるかの扱いは、それ自体が問題である。宗教に中立的に描かれた人間本性の内の何が、非宗教的存在を宗教を発展させるまでに至らせる手掛かりとなるのかが問われねばならない。神学はこのような前提を自明のものとすることはできない。人間が神の被造物であるならば、神への関係の痕跡は人間本性の内に見出されねばならない。こうした問題は、人間生物学と神学との学的対話において、真剣な討論に値するテーマと見なされねばならない。

2.

[107/2-108/1]

人間の本質概念に対する宗教的テーマの価値→進化と文化形成との関係

ウィルソンの社会生物学の問題

固有のあるいは類似した遺伝子の拡大が個人の振る舞いにおける支配的な動機である

このような理論を倫理や宗教に適用する試みは、宗教を非宗教的目的に従属されることになる（宗教の機能的理解）。宗教の真理主張とは相容れない。

信者の遺傳的財の拡張という目的に役立つという観点からの宗教理解は誤っている。こうした仕方でのユダヤ教解釈は預言者的メッセージの正反対のものである。

文化人類学からの批判

個人の忠誠の対象となる親族体系や家族共同体は様々であり、厳密な範囲の最大化という基準に対応するわけではない。人間行為の遺傳的な決定因子に、人間の象徴形成活動や象徴的な意味体系によって規制された行為が付け加わる。

文化構築に対する宗教の機能は、遺伝子最大化の目的に還元できない。文化の高さや業績についての評価は、別の基準からなされる。

3.

[108/2-109/1]

人間的振るまいの構造における相反性の根源についての問い

プレスナーの屈折（破れ、不完全さ）の議論、身体のコントロールの喪失

アウグスティヌスの伝統における罪概念とキルケゴールによる改訂

自己矛盾、人間の同一性の破れ

道徳的なものから構造的なものへ

破れと人間の固有性との関係

人間の生遂行に固有の問題の人間生物学的な根源についての問いは避け得ない。文化科学や神学の機能は、人間を扱う生物学者に対して、過度に還元的な人間概念によって作業しない方がよいということを思い起こさせる点にある。人間の实在の複雑さを視野に入れることの大切さ。

[109/2-110/1]

実例として、コンラッド・ローレンツの議論（「攻撃 悪の自然誌」）

フロイトの死の本能に対して、攻撃は種の維持という積極的機能を持つ、攻撃の抑制がはずれ破壊的になるのは人間においてであると主張。

しかし、人間の振る舞いにおける破れは攻撃という現象に限定できない。罪もより根源的で一般的に理解されるべき事態であり、攻撃はその現象形態の一つ。

罪の核心は「自己愛」（アウグスティヌス）、自己関係にある。ここに破れが探究されるべき水準がある。

4.

[110/2-111/1]

人間の生遂行の特殊性と人間に先行する進化との間の関連の問い

人間生物学と神学との協力のための論究すべき前提は、生命進化の理解に関わる。

進化過程における新しいものの出現、創発的進化

↓

生命とは何か

聖書において問題となる生命は、有機体や細胞の機能ではなく、神から生命体へ到来する働き、生命を与える神的靈の働きである。

靈とは力の場である。

それを取り巻く領域なしに有機体は生きられないということを考えるならば、聖書的な生命像と現代生物学との間の一見架橋不可能な断絶は、別の様相を示す。

環境を超えて進む自己超越性は、人間特有のものではなく、多くの生命の特徴である。問われるべきは、有機体が生過程の主体なのか、あるいはそこに見出されるのは、有機体がそれを上回る力動性へと引き込まれていることではないのかということ。進化の過程では、事実はそこにあるように見える。進化の過程は個体の生命を通して遂行されるが、個体はこの過程の本来の役者ではなく、それに参与するに過ぎない。

マイケル・ポランニーは、系統発生も個体発生も場の理論を通して統一的な過程と理解できると仮定するに至った。

ポランニーの議論の意義・射程

- ・進化論とエコロジーを、ウィルソンの社会生物学に対する対案的な理論モデルにおいて結びつける
- ・発生学に止まらず、生物学と物理学との結合を展望させる。
- ・神学的意義

聖書と生物学におけるそれぞれの表象を結びつける可能性を開く。

生命進化の過程を規定する場の作用と神的霊という場の作用との関係についての問いは解明すべきものである。

神の創造的霊とエコ・システムとの相互関係

いわば諸生命体自体が、場として理解されたエコ・システムという単数形で記述される

<ポイント>

1. 宗教と科学の関係論の可能性

「生命」をモデルとして、それを一般化する

聖書的キリスト教的生命理解と現代の生物学的生命理解

2. 媒介項としての人間学

シェーラーの世界開放性の人間学、人間の固有性としての宗教

3. 世俗時代（近代）の歴史状況・知的状況下における問題

- ・神学／無神論、そして中立的世俗的学
- ・相互批判（共通基盤）と言語の相違 → 生の多元性の問題、形而上学
- ・キリスト教における核と周辺（？）、何が変わりうるものか？
- ・還元主義に対する対案、遺伝子の解明は何をなし得るか

4. 関係性と場

実体形而上学の根強さと、そこからの離脱、物から関係へ

可能性の場（波動方程式）とそのつどの観測による収縮（粒子化）